

1930—1940年代のドイツ亡命作家と文化の問題

足立 邦夫

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2002年9月30日受理)

はじめに

ヒトラーが政権を掌握する1933年1月30日以前からドイツの知識人の中には、例えユダヤ系ではない場合でも、祖国をあとにしていく者が増え、ヒトラー政権登場後は、この傾向はさらに強まった。これらドイツ人たちが選んだ自由の地はドイツ周辺諸国のフランス、オランダ、スイス、スウェーデン、チェコスロヴァキア、ソ連のほか米国、南米の諸国など広い範囲に及んだ。

祖国を離れた1人にベストセラー小説『西部戦線異状なし¹』(*Im Westen nichts Neues*)の作者エーリヒ・マリア・レマルク² (Erich Maria Remarque) がいる。レマルクはヒトラーが政権の座に就く直前、ベルリンからスイスに逃れている。さらにドイツ国籍剥奪後の1939年には米国に移り、第2次世界大戦終結後の48年、欧州の地を再び踏むまでの9年間、亡命生活を送った。

これらドイツ人たちは戦後ドイツに帰っても必ずしも歓迎されたわけではない。ドイツの地にとどまったドイツ人たちは戦線に駆り出されたり、連合軍による激しい空襲と地上戦にさらされ、住む家を失い、食糧不足に悩まされ、さらには秘密国家警察(ゲシュタポ)の監視の目を受け続けた。それだけに戦争が終わって「のほほんど帰ってきた同胞たち」に向ける目は厳しいものになった³。

しかし、亡命生活を送っていたドイツ人たちも決して「楽園の日々」を過ごしたわけではない。異国の地で生活の糧を手に入れることは、国際的に名を知られた一部の人たちを別にすれば厳しかった。

それ以上に作家たちを苦しめたのが「異文化」の壁である。自己の精神活動の息を止めかねない異文化の中で耐えながら創作活動を継続することは日々対決することに等しかった。

本論文では当時のドイツの作家たちが亡命生活の中で直面した「文化」の問題についてエーリヒ・マリア・レマルクに焦点を当てながら考察したい。

I

レマルクがドイツをあとにしてスイスに移ったのはヒトラーが政権を掌握する前日の1933年1月29日のことである⁴。

ドイツでは第1次世界大戦後のヴァイマル共和国成立(1919年)以来、戦勝国による巨額な賠償金が課せられ、経済は混乱、政府は次々と入れ替わり国全体が動揺していた。

このような状況下、1928年5月の国会選挙で得票率2.6%だったナチ党（国家社会主義ドイツ労働者党）は30年9月の選挙では得票率18.3%で社会民主党の同24.5%に次いで第2党に躍り出した。さらに32年7月の選挙では得票率37.4%で第1党となり、32年11月の選挙では得票率を33.1%に減らしたものの第1党の座は保った⁵。

ナチ党が政権に就いたあと、ドイツの歴史の中でも特異な12年間の歴史が始まる。

米国映画『西部戦線異状なし⁶』がベルリンで一般向けに公開されたのはナチス政権誕生2年余前の1930年12月6日夜のことである。レマルクはこれに先立つ同年8月5日、彼だけのためにミュンスター（ドイツ）で催された特別試写会で出来ばえを確かめていたし、ベルリンでは12月4日、招待客向けの試写会が行なわれていた。一般公開で上映が始まると、館内に陣取ったナチ党員たちが大声で抗議の声を挙げ、笛を鳴らし、悪臭弾を投げ、白鼠を放ち、混乱状態となり、上映は中止された⁷。

ナチ党員たちによる反レマルク感情は『西部戦線異状なし』が出版されたときから起きていた。ナチ党員たちは同書をドイツの敗北を肯定し厭戦を煽るものとして「非ドイツ的書」のレッテルを貼っていた。同書が出版されたときはナチ党は国会での全議席491のうちわずかに12議席を占めるだけの地位に甘んじていた。しかし、30年12月には同党は第2党の地位を確保していただけにナチ党員たちの映画上映ボイコットは力を得ていた⁸。

ヒトラーが政権を掌握したあとの1933年5月10日にはレマルクなどの「非ドイツ的書」は焚書となり、さらにゲシュタポによって『西部戦線異状なし』は11月20日、また12月12日には同書の続編の性格の書『還りゆく道⁹』（*Der Weg zurück*）が発禁となり没収された。

レマルクがスイスに避難先を確保したのもドイツでのこのような反レマルク気運に懸念を抱いていたからで、さらにはドイツ国籍を剥奪された（1938年7月4日）あとの、1939年3月23日、米国に最初の足跡を記した。このあと、いったんは欧州に帰るが、同年9月4日、再び米国を訪れ、以後48年に欧州に帰るまで米国で亡命生活を送った。

1939年3月23日付の日記¹⁰には、客船から見る高層建築物の林立するニューヨークの街への驚きや、夜にはニューヨーク在住の友人に連れられて観たレヴュの絢爛さなどが記されている。だが、9月4日付の日記では、そのようなナイーブな驚きなどは過去に押しやられている。9月1日に始まったナチス・ドイツ軍によるポーランド侵攻、すなわち第2次世界大戦勃発がレマルクの心に暗くのしかかっていた¹¹。

II

ヒトラーの政権掌握前後、ドイツの作家たちの中でナチズムのもつ全体主義と暴力主義に強い警戒の念を抱いていた人たちは国外に向かった。

1929年度ノーベル文学賞受賞者トーマス・マン（Thomas Mann）は1933年2月11日、アムステルダム、ブリュッセル、パリでの講演、アローザ（スイス）での休養の目的でミュンヘンの自宅を出たままドイツには帰らなかった。ユダヤ系のリーオン・フォイトヴァンガー（Lion

Feuchtwanger) は前年の11月、全米処々で開かれる朗読会に出席するため、訪米していた。トーマス・マンの兄ハインリヒ・マン (Heinrich Mann) は怪しまれないように雨傘だけを持って33年2月21日、フランクフルト・アム・マインまでの汽車の切符を買ってベルリンを發ち、翌日にはフランスのストラズブールに入った。ベルトルト・ブレヒト (Bertolt Brecht) は汽車でベルリンからプラハに逃げた¹²。

事態の推移を見守ろうとして時間を無駄にした者たちは自宅や列車の中で逮捕された¹³。あるいは、未来が閉ざされると悲観するあまり自殺する者もあった。

さらには国外に逃れても必ずしも安全ではなかった。ベルリンからのユダヤ人ジャーナリストがレマルク邸の敷地内で死亡するという事件も起きている。ゲシュタポの手先の暗躍の結果ではないかと当時推測された¹⁴。また、国外に出ても定かでない将来に絶望するあまり、自らの命を絶つ作家も出ている¹⁵。

国外に身を移してもそこは必ずしも安住の地ではなかった。世界的にその名が知られ、資力もあったトーマス・マンはスイス政府によって歓迎され、スイスに邸宅を確保していたレマルクも問題はなかった。だが、他の多くの作家たちは移住や出版活動を拒否・禁止された¹⁶。着の身着のまま逃げ出した作家たちは金銭的にも行き詰まり、亡命先の政府もこれらの作家たちにいい顔をしなかった。困窮する作家たちは仲間のドイツ人作家たちによって金銭的な支援を受けてようやく息を継ぐという状況だった。レマルクも生活に困る仲間の亡命作家たちを金銭的にも支援している¹⁷。

ドイツの亡命作家たちが直面したさらなる深刻な問題は創作活動を異国の地でいかに継続していくかだった。

このような作家たちの発表の場となったのがドイツ語による大小さまざまな「亡命文学雑誌」(Exilzeitschrift) だった。パリ、ロンドン、アムステルダム、プラハ、モスクワなどで発行された¹⁸。

本国で発禁となっているドイツ人作家たちの書をドイツ語で出版する出版社として活動したのが、アムステルダム (オランダ) の2つの出版社クヴェーリードー (Querido) 社とアラールト・ド・ランゲ (Allert de Lange) 社だったことはよく知られている。ハインリヒ・マン、フランツ・ヴェルフェル (Franz Werfel)、リーオン・フォイヒトヴァンガーらは同地の出版社から著書を出した。レマルクも『西部戦線異状なし』以来第3作目にあたり、亡命後の初の作品であるドイツ語版の『3人の戦友』(Drei Kameraden) を1938年、クヴェーリードー社から出版している。トーマス・マンはベルリンの老舗出版社で首脳陣の大半がユダヤ系であったS・フィッシャー社がヒトラー政権登場後、ドイツを離れ (会社は分割され、半分はベルリンに残る)、最初ウィーン、オーストリアがドイツに併合されたあとはストックホルム、さらにはニューヨークに新会社を移していくにつれ、同社を通じて著書を出版し続けた¹⁹。

しかし、ナチス・ドイツがオーストリアを併合、チェコスロヴァキアも解体 (1939年3月) されるなど、ドイツ語圏がナチスの支配下に入ると亡命文学の市場は狭まり、加えてオランダ

も1940年5月15日、ナチス・ドイツ軍に降伏すると、亡命作家たちの作品表現の場はさらに縮小され、亡命作家たちの命運は細まっていく。

このような中でレマルクは恵まれた存在だった。著書が英訳されて、英国や米国で出版されていたからである。『3人の戦友』についても1937年、米雑誌『グッド・ハウスキーピング』(*Good Housekeeping*)に翻訳連載され、さらに単行本で出版されている²⁰。『西部戦線異状なし』の成功によってレマルクの名は米国の出版社で確立され、固定読者を獲得しつつあった。2作目の『還りゆく道』も米国で翻訳出版されている。第4作目である『汝の隣人を愛せよ』(*Liebe Deinen Nächsten*)から第5作目で亡命時代最後の作品となっている『凱旋門』(*Arc de Triomphe*)に至るまでレマルクの直筆原稿がタイプで清書され、英訳されて米国で出版されるという方法がとられた。これは戦争が終わったあとも続き²¹、『生命の火花』(*Der Funke Leben*)は1952年1月に英語版が出されたあと、同年7月にドイツ語版が出版された。それに続く1954年出版の『愛する時と死する時』(*Zeit zu leben und Zeit zu sterben*)も英語版が先だった。

III

亡命の身でありながら、金銭的にも恵まれ、作家活動も継続的に行なえ、出版すれば売れるという恵まれた環境にあったレマルクだったが、ドイツの文化を背負いながら異文化の中で生き、ドイツ語文が英語に翻訳されても、原文の背景にある「ドイツの文化」を映し出すには限界のあることを感じ続けていた。

「文化の問題」についてレマルクは米国を「第2の故国」とする前の1939年に自らの見解を示していたとみられる。同年5月8-10日にニューヨークで開催された国際ペン大会の「文化はいかに亡命を乗り越えて生き延びられるか」分科会にペーパー参加したとみられるからである。「推測」でしかないのは、その原稿の存否が現在のところ確認されていないためである²²。

だが、レマルクは戦後の1946年に当時のウィーンで発行されていた雑誌『オイロペイシェ・ルントschau』(*Europäische Rundschau*)との会見の中で自らの体験を通しての「文化の問題」について見解を明らかにしている²³。

レマルクは欧州を遠く離れて亡命生活を送るドイツの作家は「2重の闘い」を強いられたと述べている。1つは「自らの精神的存在のための闘い」であり、他は「自らの仕事のための闘い」としている。そのような亡命作家を「後方に味方陣地を持たない兵士」になぞらえている。仮に翻訳出版されても、それはドイツ語のオリジナル原稿と同一のものではないと次のように語る。

[. . .] Die Originalität jedes Schriftstellers beruht zum großen Teil auf seiner Sprache. Rhythmus und Klang der Sprache sind die beiden Dinge, die nicht übersetzt werden können²⁴.

[. . .]

レマルクの考えでは、「翻訳されたもの」はオリジナルと似通ったものであっても、「別物」

ということになる。

さらにレマルクは会見の中で異文化の下では特に作家たちには試練が課せられると述べている。「多くの、いわゆる知的職業には外国でも種々色々と就くことは可能である。医者やエンジニアなどは外国語で試験に合格し、今日働きながら成功を収めている。教授は米国の大学で働いている。他の亡命者たちも新しい職を得ている。しかも、初老の歳であることも珍しいことではない。そして自己の証を手に入れている。難しいのは作家たちにとってである。望んだとしても、簡単には『右向け右』とはいかない。受け入れてくれた国の文学界に難なく飛び込むこともできない。作家の問題は彼のこれまでの生活を通して欧州のあるいは私の場合にはドイツ的となっていることだ²⁵」と指摘している。

一方、祖国ドイツではナチズムの嵐が吹き荒れ、亡命作家たちにはそこにあったものがいまも存在しているかどうかも分からない。その結果、亡命作家たちにとっては作品で取り上げる題材は限られたものに限定されてくる。レマルクはいう。

「歴史的テーマと取り組まないならば、亡命作家の作家活動の領域は極めて狭いものになってしまった。彼が知っていたドイツはもはや存在せず、作家が見守ってきたあのドイツは過去13年間、作家を恐怖させ、憎悪をかき立ててきた。彼にはやがてうんざりさせる亡命という限られた領域のみがかりうじて残されているに過ぎない²⁶」

「彼」とはレマルク自身のことである。レマルクの「作家活動の狭い領域」とは亡命者や難民をテーマとした領域のことを指している。「亡命文学」と呼ばれる領域のことである²⁷。

ヒトラーの政権掌握で故国を捨て、時には自分の存在を証明するパスポートも持たず、あるいは偽造パスポートで自らの存在を偽りながらチェコスロヴァキアからオーストリアへ、オーストリアからスイスへ、スイスからフランスへ、フランスからスペインへ、そして欧州大陸から新大陸へ脱出する最後の希望の国ポルトガルへと漂う難民たちの運命を『汝の隣人を愛せよ』などの一連の作品でレマルクは書き続けることになった。

IV

「言語」は人間社会の「文化」の中でも最も重要な位置を占めるものであろう。外国で自国の文化との相違を最も端的に教えられるのは空港や港に降り立ったり、自動車や列車で国境を越えたときに変わる標示板などの文字の変化であり、耳に入る異質な言葉の響きである。体は自然と身構え緊張してくることは、外国訪問すればおのずと知るところである。

本論文で使用している文化とは「社会を構成する人々によって共有・伝達される行動様式ないしは生活様式の総体」と定義づけたい²⁸。ここでの「社会を構成する人々」とは、文化が「日本の文化」「ドイツの文化」と呼ばれるように、「民族」とみるのが一般的である。

民族の文化には、例えば異民族の料理を食して食文化に接することは、最初は自らの食文化

との違いから戸惑いがあっても、体感的に次第に理解していくことは可能であろう²⁹。

これに対して言語は民族の文化が総合されたものとみるべきだろう。従って、言語は食文化などその民族のいわば「個別的文化」が重層的に積み重なって成り立っていると解釈することも可能である。それだけに異民族の言語を自分のものにするのは容易ではないことになる。表面的にはネイティヴスピーカーと変わらないほど言葉を流暢に話せ、理解し、書けたとしても、言語の中に隠し絵のように秘められた個々の文化まで完全に自分のものにするのは容易ではないだろう。その民族の中で生まれ、その中で生活しながら、無意識に空気を口の中に取り込むように文化を自分の中に取り込んでいくのでなければ、異民族の言語に精通したとはいえない。

フランスに住み、フランスの映画に出演し、フランス語を流暢に話すことのできる西ドイツの女優に論者はインタビューしたことがある。彼女はドイツへの「祖国愛」はないと語りながらも、母国語と自分との関係を次のように語っていた。

「ドイツ語を話すことができるのはある種の享樂であると感じることがたびたびありますね。例えば、外国に長くいたあとに、ドイツ語を思いのまま喋ることができるような環境に置かれた時。自らの言葉への安住の気持ち——それが私にとっての『祖国愛』でしょう³⁰」

母国語を思いのままに話すことができるのは「ある種の享樂」——この気持ちは異言語の壁に囲まれながら暮らした者でしか理解できない感情である。それは言語を通して自らの文化を知悉し、自分の思いを表現するに苛立ちも感じないという心の平静さを得ることができることと深く関係しているからであろう。これは外国に行って、その国の言語を少しでも理解できれば——文化の一部でも知っているということになるが——心平静にて行動できることと共通性がある。

V

日本の文学では「亡命文学」は未知の分野である。異国の文化に触れ、自国の文化との葛藤に悩むという文学作品はあっても³¹、故国の政治的迫害から逃れ、異国での文化と対決しながら創作活動を強られるという経験が日本の作家には皆無だからである。これは日本の歴史の中で日本人のほとんどが「亡命」や「難民」という運命に直面したことがないことと深く関係していることは指摘するまでもない³²。

政治の面ではそれは日本政府が難民の定義や他国の難民の受け入れについてはいまだに曖昧なままであることにも表われている³³。

第2次大戦が終わって半世紀以上が経った現在でも世界から亡命・難民問題は消えていない。バルカン半島、アフリカ、ロシア、中央アジアの地で難民は生まれている。中東でのパレスチナ難民問題はその半世紀の間、同地と世界の不安定さの要因となり続けている。第1次大戦の

あとに創設された国際連盟ではなく、第2次大戦後の国際連合の中の機関として創設された国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が国連の機関の中でも最も多忙な機関の1つであることは難民問題が冷戦が終焉してもなお今日的な問題であることを示している。

レマルクの『西部戦線異状なし』を最初に翻訳出版したのは戦前の中央公論社だった³⁴。戦後は新潮社が同書を初め、戦後間もなくの翻訳書のベストセラーの1つとなった『凱旋門』を初め『愛する時と死する時』まで4点を文庫本で1950年代に出版している。その後のレマルクの作品は早川書房などが手がけ、新潮社からの新たな出版はない。これは日本の読者が「亡命文学」に関心を示さなくなったことと無縁ではないと思われる。

これに対してドイツではレマルクの作品は作者が没して30年以上が経ってもなお読み継がれている。これには作者がドイツ人であるということ、世界的なベストセラー作家でありながら亡命を余儀なくさせられ、戦後も長らく故国から冷たい扱いを受け続けたことに対するドイツ人の「過去克服」の気持ちが影響しているという理由もあるだろう。

しかし、それ以上に大陸の中にあるドイツの地（ひいては欧州の地）が決して未来にわたって安定が保障されているわけではないことをドイツ人たちは知っており、亡命・難民の運命を自らの身にいつか起こり得るものという気持ちを捨て切れないことと関連していることにも理由があると論者は考える。

〈注〉

- 1 1929年1月31日、ベルリンのプロピレーエン出版社（Propyläen-Verlag）から出版。
- 2 1898年6月22日、ドイツのオスナブリュック（Osnabrück）に生まれ、1970年9月25日、ロカルノ（スイス）の病院で死去。
- 3 最近の事例としては、ソ連との戦争やイスラム過激派による政治的迫害から逃れ、外国で暮らしていたアフガニスタン人たちが故国での政治的安定の回復とともに再建に貢献できないかと帰国したところ、祖国に残り、暗黒の時代を耐え忍んだ同胞たちからは冷たい目で見られていることがある（『ニューズウィーク日本版』2002年7月24日号、36-37頁）。
- 4 レマルクはベルリンからスイスに自ら運転する自動車に入っている。この事実はWilhelm von Sternburg. »Als wäre alles das letzte Mal« (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1998), S. 228による。以後、同書を[ST]と略称する。レマルクは1931年にマジョーレ湖畔のスイス側の街ポルト・ロンコに邸宅を購入していた。
- 5 林健太郎編『世界各国史3 ドイツ史（増補改訂版）』（山川出版社、1995年）398頁、406頁。
- 6 原題は*All Quiet on the Western Front*。監督ルイス・マイルストーン。配給ユニヴァーサル・インターナショナル・ピクチャーズ。上映時間140分。米国封切は1930年4月29日。
- 7 ST, S. 218ff.
- 8 ナチ党の指導者の1人で映画ボイコット運動を指揮したヨーゼフ・ゲッベルス（Joseph Goebbels）は1930年12月6日付日記（Joseph Goebbels. *Tagebücher. Band 2: 1930-1934*. Hrsg. v. Ralf Georg Reuth (München: R. Piper, 1992), S. 543）でナチ党员による阻止行動を記述したあと「市民数千人がこの見世物を気楽に楽しんだ。上映は中止となった。次も同じだ。われわれは勝利した。私は仲間の若者たちとカフェに座った。体験を語り合った。自慢話ばかりだったが、すべてうまくいった」（論者訳。以下に訳出されているものも論者によるもの）
- 9 1931年、プロピレーエン出版社から出版。
- 10 米ニューヨーク州ニューヨーク市のニューヨーク大学（私立）フェイルズ図書館に保管のエーリヒ・マリ

ア・レマルク・コレクション中のレマルク直筆の日記を指す。同コレクションは「Erich Maria Remarque Collection, Fales Library, Elmer Holmes Bobst Library, New York University」と呼ばれている。論者は2002年9月3-11日の間、同図書館で同コレクションの調査研究を行なった。以後、同コレクションを「RC」と略称する。なお、同コレクションの日記とレマルクの手紙は部分的にはErich Maria Remarque. *Das unbekannte Werk. Frühe Prosa, Werke aus dem Nachlaß, Briefe und Tagebücher*. Bd.5. Hrsg. v. Thomas F. Schneider und Tilman Westphalen (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1998)に収録されている。以後、同書を「UW5」と略称する。

11 1939年9月4日付日記、RC。

「9月4日ニューヨーク、夜

8月29日に一層悪いニュース。30日午後バリエを発ち、シェルブールに向かう。心重苦しい。クイーン・メアリー号が埠頭に横付けになる。大きく、どっしりとしている。ラジオを聴く機会も少なかった。新聞も読まず。乗船客の数は3倍。図書室などどこもかしこも寝室に変じる。爆弾のようにポーランド侵攻と英国宣戦布告のニュース。戦闘行動なきことを祈るばかり。緩慢に漂っていた戦争始まりの臭い。ニュースの捨える甲板のラウンジも静かなり。英国王の詰まりがちな演説。今朝到着。昨日来戦艦の護衛を受けながら魚雷を警戒してのジグザグ航行。アテナ号が魚雷を受けたというニュース。[・・・]

12 ST, S. 238f.

13 週刊政治・文芸雑誌『ヴェルトビューネ』(*Die Weltbühne*)の編集長カール・フォン・オシエツキー(Carl von Ossietzky)などが1933年2月27日の国会議事堂炎上事件のあと逮捕される。

14 トーマス・マンは1933年5月8日付日記の中で「ドイツ国内での身の毛のよだつような事件や殺戮についてのニュースだけではなく、国外でのそうした事件のニュースさえ聞こえてくる。メンデルスゾーン青年が『事故』死したが、どうやらレマルクと間違えられたらしい」と記している(トーマス・マン(若田行一、浜川祥枝、森川俊夫共訳)『トーマス・マン 日記 1933-1934』(紀伊國屋書店、1996年)85頁)。メンデルスゾーンはフェーリクス・マヌエル・メンデルスゾーン(Felix Manuel Mendelssohn)のことで、スイスに亡命していた。レマルクを訪問したあと、レマルク邸の敷地内で死亡。事故死の可能性もあったが、殺害されたとする見方が有力だった。

15 その1人がオーストリア国籍のユダヤ系のシュテファン・ツヴァイク(Stefan Zweig)で1942年2月23日、英国を経て渡った亡命先のブラジルで2番目の若き妻とともに自殺した。23歳の文学青年レマルクは1921年、ツヴァイク宛てに手紙を書いて「2、3の詩の習作を送ってよろしいでしょうか」と問い合わせたことがある(UW5, S. 49f.)。レマルクがツヴァイクの自殺を知ったのは米亡命中で、42年3月3日付日記(RC)では「[・・・] 澄み切った朝。太陽。シュテファン・ツヴァイクの遺書を読む。あまりに歳をとり過ぎている、-60歳だった-新しい人生に取り掛かるには。英国国籍を取得していた、-十分なお金、-一名声-。悪い戦争ニュースを気にかけている。もはや帰国は不可能と絶望していた。[・・・]」と記している。もっともレマルクと同じように米国に亡命し、プリンストン大学で教鞭をとり、その後カリフォルニアに移り、自由な作家活動を行っていたトーマス・マンは42年3月2日付の日記では「[・・・] 愚かで、弱くて、恥ずべきだと私が考えているツヴァイクの死[・・・]」としている(トーマス・マン(森川俊夫、横塚祥隆共訳)『トーマス・マン 日記 1940-1943』(紀伊國屋書店、1995年)621-622頁)。

16 山口知三・平田達治・鎌田道生・長橋扶美子『ナチス通りの出版社 ドイツの出版人と作家たち1886-1950』(人文書院、1989年)130-131頁。国外での新会社をスイスのドイツ語圏に属するチューリヒに置こうとしたS・フィッシャー社もスイスの閉鎖的な政策のため同計画を断念している。

17 Thomas Schneider. »Vorwort. Ein militanter Pazifist? Erich Maria Remarques Schriften und Interviews zum Zeitgeschehen«, in: *Ein militanter Pazifist. Texte und Interviews 1929-1966*. Hrsg. und mit einem Vorwort v. Thomas F. Schneider (Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1998), S. 22f.

18 ST, S. 241

19 スウェーデンの会社は、S・フィッシャー社がニューヨークに移っても存続し続け、出版活動を行なった。ニューヨークの新会社はトーマス・マンの英訳の著作権が米国の出版社によって確保されていたため、同氏以外のドイツ人作家の作品を英訳出版した。これらの経緯は前掲書『ナチス通りの出版社 ドイツの出版人と作家たち1886-1950』76-88頁; ST, 250f.による。

- 20 Julie Gilbert. *Erich Maria Remarque und Paulette Goddard. Biographie einer Liebe*. Übers. v. Nikolaus Gatter (Düsseldorf und München: List, 1997), S. 232
- 21 これには「はじめに」で述べた、ドイツの戦後にあった亡命作家に対する市民の冷淡な態度も影響していた。また、レマルクと米国の出版社との契約内容も影響していたとも思われる。
- 22 レマルクはフランスの作家たちがドイツの亡命作家たちに呼びかけて1935年6月21-25日、パリで開催された「文化擁護国際作家会議」にも参加している。ただし、同会議の名称での「文化」は後述の文末脚注28での一般的な定義の意味合いで使われている。
- 23 『オイロペイシェ・ルントシャウ』との会見記事はM. Feldmann. » Gespräch mit E. M. Remarque«, in: Erich Maria Remarque. *Ein militanter Pazifist. Texte und Interviews 1929-1966*. S. 84ff. に収録されている。
- 24 ebd, S. 86
「小説家であればだれでもそのオリジナリティの大きな部分を自らの言語に拠っている。自らの言語のリズムと響き、この2つは翻訳不可能である」
- 25 ebd, S. 86
- 26 ebd, S. 86
亡命ドイツ作家たちの創作活動は、亡命先でドイツ語による上演が期待できないだけにドイツ文学の主要なジャンルであった演劇から離れて小説に重点が移り、しかも前衛的、実験的な作品は影をひそめ、伝統的形式が重んじられた歴史小説が優位を占め、また亡命先の国や都市が舞台となるような小説はほとんど書かれなかったという（前掲書『ナチス通りの出版社 ドイツの出版人と作家たち1886-1950』159-160頁）。
- 27 ドイツ語では亡命作家の書いた小説はExilliteraturあるいはEmigrantenromanと呼ばれ、日本では「亡命文学」という訳語があてられている。しかし、ドイツ語には「亡命者や難民の運命をテーマとした小説」という意味合いも含んでいる。
- 28 「文化」についての定義は人によってさまざまである。「文化」とは一般的には「文学や絵画などの精神的な創作活動から生み出されたもの、あるいはその成果に接することで得られる精神の充実感・満足感」などを意味するものとして使われることが多い。文化人類学での「文化」は本論文の定義のように使われている。
- 29 「食文化」の柔軟性について「食習慣は若年期に教え込まれ、人生の全般を通じて変化せず継続する一方で、変化を受けやすいということもまた事実である」（ポール・フィールドハウス、知仁皓明訳『食と栄養の文化人類学——ヒトは何故それを食べるのか——』（中央法規出版、1991年）35頁）とされ、同書では、変化は教育・医療上の処置・自然環境や社会環境の変化の結果によってもたらされるとしている。
- 30 拙著『ドイツ 傷ついた風景』（講談社、1992年）184頁。
- 31 夏目漱石や永井荷風らの作品など。
- 32 外国でも作品の多くが翻訳されている日本の作家の1人村上春樹は自己の作品とその翻訳との関係について「僕はこれまで僕なりに、母国語たる日本語を頭の中でいったん擬似外国語化して——つまり自己意識内における言語の生来的日常性を回避して——文章を構築し、それを使って小説を書こうと努めてきたとも言えるのではないかと思う」（村上春樹「翻訳すること、翻訳されること」芳賀徹編『翻訳と日本文化』（山川出版社、2000年）114頁）と述べて、レマルクの考えるような深刻さはない。このような発言は平和な日本語環境が確保されている状況の中でいえることであろう。
また、日本のドイツ文学者たちの中には戦前、ナチス文学を賞賛、日本に翻訳・紹介しながら戦後は手のひらを返したように亡命作家たちの作品を翻訳・紹介した節操のなさ（池田浩士『白水叢書 25 ファシズムと文学 ヒトラーを支えた作家たち』（白水社、1978年）303-315頁）も「亡命」によって異文化との対決を強いられるという厳しい試練と日本の文学者たちが無縁であったことがもたらしたものであろう。
- 33 このことが2002年5月に起きた中国の瀋陽日本総領事館への朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）住民5人駆け込み事件に対する日本外務省の対応混乱ぶりの一因ともなった。
- 34 1929（昭和4）年、秦豊吉の翻訳で出版。奥付によると、「昭和四年十月一日印刷 昭和四年十月五日発行」となっているため、ドイツで出版されて8ヵ月余後という当時としては異例の「スピード出版」だったといえる。

German Novelists in Exile and the Problem of Culture in the 1930s and the 1940s

Kunio ADACHI

College of Liberal Arts and Science for International Studies,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2002)

Many intellectuals in Germany sought political asylum in adjacent countries or in America before and after the Nazi regime was established in their own country. They experienced great hardships in foreign countries living with different cultures. The trials of novelists in particular were extremely severe because it was very difficult for them to continue their creative work in their own language, the core of their culture. Erich Maria Remarque, the author of *Im Westen nichts Neues* (*All Quiet on the Western Front*), says that the originality of every novelist is based largely on his language, and that the rhythm and the sound of the language cannot be translated. He describes the fate of refugees in the 1930s and the 1940s in his novels, which are still read in Germany and Europe today. The problem of refugees is not an affair of the past in Europe. However, most of his novels have been forgotten in Japan. This could be due to the fact that the Japanese have scarcely been faced with the fate of refugees.